

第62回日本チベット学会学術大会
(2014年10月25日・苫小牧駒澤大学)
研究発表要旨

1. チベット村社会における鳥葬の相違点—有名な鳥葬場の事例から—
ガザンジェ（金沢大学人間社会環境研究科）
2. チベット・アムド地域におけるシャーマン「ハワ(lha ba)」
—レプコン・ウォッコル村の事例から— チョルテンジャブ（総合研究大学院大学）
3. 「六座上師瑜伽」にみる発菩提心—ラマの密意— 岡崎清子（チベット仏教ゲルク派）
4. タントン・ギャルポ伝説をめぐって—パロ・ティンプーの現状2014—
坪野和子（埼玉県立岩槻高等学校）
5. 1世紀以上に亘ってなされた約10回の唐・吐蕃会盟（706～821年）の様相
—唐から見た吐蕃との外交交渉— 菅沼愛語（京都女子大学）
6. タルマリンチェンのsvabhāvapratibandha理解—'brel baの定義をめぐって—
崔境眞（東京大学大学院）
7. ツォンカパ『縁起讃』の文学世界 根本裕史（広島大学）
8. ツォンカパの自立論証批判 福田洋一（大谷大学）

1. チベット村社会における鳥葬の相違点
—有名な鳥葬場の事例から—

ガザンジェ（金沢大学人間社会環境研究科）

本報告では、チベットのいくつかの有名な鳥葬を行う場所における鳥葬形態の相違点について発表したい。

鳥葬とは死亡後、死者を鳥（基本的にハゲワシ）に食べさせることである。鳥葬は鳥葬場、鳥葬師（死体を解体する人）、ハゲワシから成り立っている。昔、アジアの幅広い地域では鳥葬を行ったであろうが、その中でも有名なのは、チベット仏教の鳥葬とゾロアスター教の鳥葬である。

チベットでは、基本的に各村落に鳥葬する場所があるが、一つの地域にその地域全体で利用する鳥葬の場所がある場合もある。チベットの高名な鳥葬場は、デイクン寺、セラ寺、ガンデ

ン寺、パオンカ寺、チャラン寺などにある。しかし、このうち、現在も鳥葬を行っているのは、ダイクン寺、パオンカ寺、チャラン寺の鳥葬場である。

チベットの鳥葬は、鳥葬場・鳥葬師・村によって、やり方が違い。特に、死体を切断する方法はかなり異なる。

チベットの鳥葬の由来について、「世界葬儀事典」では、①11-12世紀インドからの布教活動と共に仏教の故事「捨身飼虎」の影響。②チベット原始宗教「ボン教」の影響。③古代の中央アジアから伝来したゾロアスター教の影響。④チベット古来の葬送様式など、色々な説がある。

筆者がチベットの鳥葬は11-12世紀インドからの布教活動と共に、仏教の故事「捨身飼虎」の影響をうけ、更にゾロアスター教の影響も受けていたと考えている。

それで、本報告ではチベットにおける鳥葬の相違点を中心とし、鳥葬の由来やゾロアスター教の鳥葬も紹介したい。

2. チベット・アムド地域におけるシャーマン「ハワ(lha ba)」

—レプコン・ウォッコル村の事例から—

チョルテンジャブ（喬旦加布）

（総合研究大学院大学・日本学術振興会特別研究員DC）

本発表では、チベット・アムド地域におけるルロ祭で登場するハワを取り上げる。その由来と新たなハワの認定の過程、村社会での役割、文革期の状況、また市場経済化と観光化が進展している今日までの変化などについて報告する。

ハワは村人にとって特別な存在であり、特に祭りの時、主導的役割を果たす。村人はトランス状態になったシャーマンをハワlha ba（「神の人」の意）と呼び、トランス状態になっていない時はトンリthun res（役人）と呼ぶ。

チベットにおけるシャーマンは、仏教以前のシャーマニズム的信仰やボン教の儀礼でも欠かすことができず、その歴史は非常に長い。シャーマンの職能者は元来、シャンション・ボン教の時代から存在した。8世紀にインドから密教の行者パドマサンバヴァが来て土着神霊の鎮撫を行った際、シャーマンを通じて神の意向をうかがい、シャーマンの制度を確立したと言われている。その後、吐蕃の統一政権が崩壊してから数百年の間に徐々に民間まで広がり、農牧民の生産や治療、占術、日常生活など隅々までその影響力が及ぶ形で、村社会に根付いたという。チベット・アムド地域にみられるハワは、文革期に批判され、その全ての活動が禁止されたが、80年代以降、次第に復活してきた。レプコン・ウォッコル村を中心に、周辺地域のシャーマンとの比較を通じて、近年のハワの状況を考察し、その特徴を明らかにしたい。それにより、チベットのシャーマン文化の中にアムドのハワを位置づけることを目指したい。

3. 「六座上師瑜伽」にみる発菩提心—ラマの密意—

岡崎清子（チベット仏教ゲルク派）

「六座上師瑜伽」は、六時に帰依発心しラマを本尊として観想修習する儀軌である。『金剛頂経』を典拠とし、瑜伽及び無上瑜伽の灌頂を受けた者が三摩耶を護持するために毎日修習する実践の一つである。

ここで、ギウトウ寺僧院長チャト・トゥルク編著の「六座上師瑜伽」（同著『瑜伽タントラの主、世尊金剛界の儀軌次第』2006所収）を解説し、高僧方への質疑をもとにその内容について紹介したい。その際、パンチェン・ラマー世著（『同全集』タシルンポ版ka上師供養巻）、及びダライ・ラマ十四世著（*Kalachakra Tantra Rite of Initiation*、Tenzin Gyatso、Jeffrey Hopkins、1985、Wisdom Publications 他）の六座上師瑜伽を参考にする。

さて当該儀軌の中に、「菩薩律儀（byang sdom）」と「発趣律儀（'jug sdom）」という言葉があり、よく似た文脈で使われ、同じ意味なのか違う意味なのか分からない。

また、儀軌によれば一日に六回、菩薩律儀を受けることになるが、これは日々新しく受け直すのだろうか？

本発表では主にこの二点を明らかにしたい。

まず、『ラムリム・チェンモ』には、「発趣律儀を備えた阿闍梨から律儀を受けるのは、‘菩薩律儀を備えた善知識の方へ行く’の一致するとみえる」（取意）とある。

次に、『菩薩地』「戒品」では「菩薩は、生を転じて失念した場合でも、善知識に会うことにもとづいて、記憶を回復するために再三[菩薩の律儀戒を]受けるけれども、新しく受けることではない。」（藤田光寛氏訳）とある。では菩薩の律儀は、過去に受けたことを思い起こしているのだろうか？

高僧への質疑により、発趣律儀と菩薩律儀を同義語としている事、また菩薩律儀は思い起こすだけでなく新たに受けている事が分かった。

一度受けた菩薩律儀は菩提を得るまで無くなることはないが、新たに授けるのは弟子を導く方便でもあろう。ラマの密意は計り知れない。

4. タントン・ギャルポ伝説をめぐって —パロ・ティンプーの現状2014—

坪野和子
(埼玉県立岩槻高等学校)

発表者はチベット文化圏における芸能分野の地域性と伝播の影響関係を音楽家の移動性と楽曲分析を併せ考察することができると考えた。移動性については、ポタラ宮楽士たち(ラダックなど)とチベット歌劇アチェ・ラモ a ce lha moの創始者タントン・ギャルポ *thang stong rgyal po* (1385–1464または1361–1485)の足跡を調査することにより明らかになるものと仮説をたてた。

カギユ派(厳密にはニンマ・サキヤとも関連がある)成就者タントン・ギャルポはヒマラヤ地域の川に鉄橋をかける目的で各地を巡回したとことで知られる。これは伝記および民間伝承による共通の認識である。また彼は歌劇団を同行させ、チャリティー上演によって橋建設の寄進を広く集めたともいわれる。

本発表は、2014年3月にブータンのパロを中心としたタントン・ギャルポに縁起を持つ橋・寺院・マニ壁、チョルテンおよびその周辺の調査報告である。発表者はタントン・ギャルポ・ナムタル 《*dpal grub pa'i dbang phyug brtso 'grus bzang po'i rnam par thar pa kun gsal nor bu'i me long zhas by aba bzhugs so*》の記述からムンmonのパド *pa gro*(ブータンのパロ)を調査地として抽出した。さらに明確な調査場所はドゥク・カギユ派ンガワン・テンジン(前)金剛阿闍梨がインフォーマントとして情報を授けてくださった。

今回原則非公開の寺院で特別に撮影許可いただいた画像も発表する。

5. 1世紀以上に亘ってなされた約10回の唐・吐蕃会盟(706~821年)の様相 —唐から見た吐蕃との外交交渉—

菅沼愛語(京都女子大学文学部)

本発表では、唐と吐蕃の長期に亘る外交交渉の様相を、主として唐側の視点から明らかにしていく。唐と吐蕃は、最初の「神龍会盟(706年)」から、最後の「長慶会盟(821年)」まで、実に115年もの長い期間に、約10回も会盟の締結、もしくは会盟締結のための交渉を行っている。これは唐が吐蕃との外交交渉を非常に重視したことを端的に示している。

吐蕃との会盟締結および外交交渉において、唐側が重要視した事項は、主として以下の3点であった。

①吐蕃との和平・停戦、

②吐蕃との国境劃定に関する事柄、

③捕虜返還の問題。

①②は開元会盟、建中会盟、長慶会盟で重視され、③は吐蕃との和睦交渉や会盟のための交渉を開始する際、唐が重要視した条件であった。しかし、唐側の国内情勢の悪化（藩鎮の乱など）により、吐蕃との和睦を優先する場合には、唐は吐蕃に領土の割譲を許可すること（奉天盟書）もあった。

本発表では、唐と突厥・ウイグル・南詔との盟約と、唐・吐蕃会盟との相違点も考察し、唐が吐蕃との外交交渉において何を重んじたかをより明確にする。また、唐・吐蕃会盟に出席した唐側の代表者が、どのような経歴やステータスであったかにも注目し、両国の交渉の実相をより明らかにしていく。

6. タルマリンチェンのsvabhāvapratibandha理解

—'brel baの定義をめぐって—

崔境眞（東京大学大学院）

今回の発表では、ダルマキールティ（ca. 600-660 / ca. -550?）の*Pramāṇavārttikasvavṛtti*に対するギェルツァプ・タルマリンチェン（rGyal tshab Dar ma rin chen、1364-1432）の註釈*Thar lam gsal byed*に基づいて、「'brel ba」の理解の背景をダルマキールティの著作の中から見出し、源流となった思想を明らかにしたい。

ダルマキールティは、所証に対する論証因の「本質的な結び付き」（svabhāvapratibandha）が成立している場合のみに、論証因と所証との間に必然的な関係が成立すると規定している。PVSVにおいて「本質的な結び付き」が述べられるのは、否定的遍充を確定するにあたり、単に異類に証因が見られないことだけ（adarśanamātra）では確定できないことを論じている箇所である。そこで、一方が無くなることによって他方が無くなる（ekaniṣṭṭyānyaniṣṭṭi）ような関係が描写されるが、それはちょうど、ドゥラ文献に見られる「'brel ba」の定義の一部「de log pa'i stobs kyis ldog pa」に相応するものである。

福田洋一氏は「ダルマキールティの論理学におけるsvabhāvapratibandhaの意味について」（1987）において、一方の無が他方の無を引き起こす「無化の連動性」が「本質的な結び付き」を規定するものであると指摘している。本発表では、タルマリンチェンがPVSVに見られる「本質的な結び付き」について説明する際に、「'brel ba」の定義の一部としてこの「無化の連動性」を挙げ、それに基づいてダルマキールティの本文を注釈していることを指摘したい。従来、'brel baの定義とsvabhāvapratibandhaの関連にまったく注目されることがなかったが、タルマリンチェンの当該箇所を読み解くことによって、その関連を明確に示すことが出来るであろう。

また、ダルマキールティの著作において、「拒斥論証」(bādhakapramāṇa)は、自己因(svabhāvahetu)の否定的な遍充関係を確定するものとしてPramāṇaviniścaya以降に言及されようになったが、タルマリチェンはこのPVSVの箇所、自己因に限らず、三種の論証因に共通する「本質的な結び付き」を論証する論証方法として「拒斥論証」を言及している。すなわち、PVSVに挙げられる「本質的な結び付き」の特性としての「無化の連動性」は、「拒斥論証」によって確認できるとタルマリチェンが理解していたことを示し、このような発想ができるのも「'brel ba」の定義の一つとして「無化の連動性」を挙げていることに依ると指摘したい。

7. ツォンカパ『縁起讃』の文学世界

根本 裕史 (広島大学)

ツォンカパ作『縁起讃 (rTen 'brel bstod pa)』は、仏教の根幹である縁起の思想を解き明かしながら、それを最初に教授した最高の教師として仏世尊を讃えるという形式で書かれた、全58詩節よりなる作品である。『縁起讃』の最大の魅力は、縁起を中心概念とする難解な中観哲学が、読み手を惹き付ける力強い詩の言葉で表現されている点にある。本発表は『縁起讃』を美文詩として評価し、この作品の文学世界を浮き彫りにすることを試みるものである。

具体的には以下の三点を論じる。第一に、縁起を説いた教師として仏陀を讃えるという形式からも明らかのように、『縁起讃』はナーガールジュナの『中論頌』をはじめとするインド中観論書や大乘経典から多くの題材を得ている。第二に、『縁起讃』の文体については、『一百五十讃』などインド撰述の讃(stava/stotra)文学からの影響が窺える。第三に、修辞技法に着目すると『縁起讃』は〈事実の描写〉(rang bzhin brjod pa)を基調とするが、第49～51詩節に〈掛詞を用いた隠喩〉(sbyar ba'i gzugs can)の技法が現れる点が注目される。

ツォンカパはこうした形式や技法を用いて、自身の中観哲学を効果的に表現することに成功し、後世のチベットにおける讃(bstod pa)文学の模範を築いたのである。

8. ツォンカパの自立論証批判

福田洋一 (大谷大学)

本発表は、ツォンカパ・ロサンタクパの中観思想において自立論証批判がどのように基礎付けられ、どのような論理で展開されているかを明らかにすることを目的とする。従来は、チャ

ンドラキールティのバーヴィヴェーカ批判をツオンカパがどのように解釈、あるいは改変したかという視点での研究が多かった。しかし、ツオンカパの文章を虚心に読んでみると、彼は自らの主張を何度も要約しながら、ほとんど同じことを繰り返し述べていることに気付く。その特徴は、従来から指摘されているように、自立派と帰謬派の違い、あるいは帰謬派による自立論証批判が、論証方法についての議論ではなく、両派の存在論の違いに帰着する点にある。従来の研究ではその点を指摘するのみに留まり、その存在論的な相違からどのような論理によって論証方法の相違が導き出されるかを明らかにしては来なかったように思われる。

本発表では、チャンドラキールティやバーヴィヴェーカのツオンカパによる解釈をひとまず捨象し、繰り返されるツオンカパの自己言及を元に、中観派の不共の勝法の根本思想から、自立論証がなぜ成り立たないとツオンカパが主張しているのかを示し、またその逆に帰謬派の論証としてはどのような論証が可能であるかも明らかにする。彼の根本思想に基づけば、帰謬派による無自性論証は形式的には帰謬論証である必要がなく、自立派が用いる論証式もそのまま承認され得る。ツオンカパが批判の俎上に上げるのは、自立派の無自性論証の論証式ではなく、その論証式の諸構成要素を論証する量のあり方についての自立派の存在論のみだからである。